國學院大學学術情報リポジトリ

1914年の「幻の大会 congrès manqué」第2インターナショナル・ウィーン大会とフランス社会党SFIO第10回ブレスト大会（1913年）と第11回アミアン大会（1914年）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国学院大学法学会 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): ジャン・ジョレース キーワード (En): 作成者: 横山, 謙一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000987

1914年の「幻の大会 congrès manqué」第２インターナショナル・ウィーン大会とフランス社会党 SFIO 第10回ブレスト大会（1913年）と第11回アミアン大会（1914年）

横　山　謙　一

はじめに

本論文では1912年11月の第２インターナショナル・バーゼル臨時大会でジョレースの主導のもとに世界の労働者にバルカンでの戦争がヨーロッパ全体の戦争に拡大することを阻止することを呼びかけた「バーゼル宣言」として知られる「社会主義インターナショナルの戦争に反対する宣言 *le manifeste de l'Internationale socialiste contre la guerre*」が出された後から1914年８月に第１次世界大戦が開戦するまでの時期フランス社会党 SFIO と第２インターナショナルの歴史を対象とする。筆者はすでに拙稿「第１次世界大戦開戦前夜：1914年７月のジャン・ジョレースの最期の闘争：サライェヴォ事件からジャン・ジョレースの暗殺まで」[(1)]で「サライェヴォ事件」から彼の暗殺までの時期に焦点を当てた小論を執筆しているし、1913年の３年兵役法に対するフランス社会党 SFIO とジョレースの活動については同じく拙稿「３年兵役法とフランス社会党（SFIO）――ジョレースの『新しい軍隊』についての構想の起点を探りつつ」[(2)]と彼の著書『新しい軍隊』との関連で「ジョレースの

（１）「國學院法政論叢」第39輯、2018年２月
（２）同上第20輯、1999年３月

『新しい軍隊 *L'Armée nouvelle*』と1913年の３年兵役法[(3)]」で取り扱っている。本論文の対象は特に1913年の社会党 SFIO 第10回ブレスト大会と第11回1914年のアミアン大会で集約されて議論され審議されたフランスに差し迫る世界大戦の危機にどのように対応し、第２インターナショナル第９回ウィーン大会にむけてどのように準備を行ったかについて、その過程に焦点を絞って分析を行う。すなわちジャン・ジョレース個人の政治的行動よりもフランス社会党全体の活動を、第２インターナショナル内部での党の行動を含めて本論では明らかにすることを中心的な目的としたい。加えて1914年８月に予定されていた第２インターナショナル第９回大会は第1時世界大戦の開戦のために「幻の大会 Congrès manqué」となったが、この大会の準備のために多くの報告と資料が残されていて、これらを検討する作業ものこされている。

1912年11月24日と25日にスイスのバーゼルで開催された第２インターナショナル臨時大会は「バーゼルの誓い」として反戦平和運動の象徴となり、ルイ・アラゴン Louis ARAGON の小説「バーゼルの鐘 *Les cloches de Bâle*」に文学作品として後の世に読み継がれた。

このバーゼル大会が目的とした1912年10月に開戦した第１次バルカン戦争がヨーロッパ全体に拡大することを阻止するという目的は、1913年５月のロンドン条約の締結によって一定果たされたかに見えた。

しかしジョレースはヨーロッパ列強による仲裁に対して心底からの不信感を抱いていた。1912年10月28日にブリュッセルで開催された緊急の国際社会主義事務局 BSI 総会において、その列強による仲裁にたいする不信感を次のように述べている。

> 「仲裁は本来２つの条件を前提としています。第１に仲裁は戦争を行っている両当事者が暗黙のうちにもしくは明確な形で要求されなければなりません。それなしには当事者のいずれかの利益になり、他方に犠牲

（３）「國學院法學」第56巻、第１号、第２号、第３号

を強います。第２に仲裁は公平無私でなければなりません。ああ！　フランスは利益を追求しているとは思いません。しかし私は仲裁が全部に対して公平無私であるとは思いません。私はヨーロッパ（列強を指す――筆者注）が過去においてトルコに対して行ったと同じ過ちをバルカン諸国に犯そうとしているのではないか心配しています。ヨーロッパはとりわけ責任があります。アブドゥル－ハミド（クーデタで弟の体制を倒したモロッコのスルタン――筆者注）の新体制が出来ると直ぐに許容してボスニア－ヘルツェゴヴィナとトリポリタニアを手に入れ、トルコのナショナリズムを煽り立てました。ヨーロッパがトルコを欺いて横取りをしたように、ヨーロッパはバルカン諸国を欺いて横取りをするために介入するでしょう。もし我々がこの仲裁と闘えないのであれば、ヨーロッパのエゴイズムを監視する必要があります。[(4)]」

ロンドン条約はイギリス、フランス、ドイツ、オーストリアの４か国の主導で開催され、列強の利害が講和条約に一定反映されることになる。この条約によってアルバニアの独立が認められ、オーストリアが望んだ通りにセルビアのアドリア海への出口を奪った。またマケドニアの国境についての明確な取り決めがなされなかったために、第２次バルカン戦争によってトルコから奪ったマケドニアなどの領地の争奪戦がおこなわれることになる。

第１次バルカン戦争の後に、すでに1908年にボスニア－ヘルツェゴヴィナを併合してバルカン半島への進出を拡大したオーストリア－ハンガリー二重帝国と、セルビア・モンテネグロなどのバルカン諸国とその背後にいたロシア帝国との対立はますます先鋭化していき、他方で第１次バルカン戦争戦後の領土分割をめぐって1913年６月には第２次バルカン戦争がブルガリアとオスマン帝国、セルビア、モンテネグロ、ルーマニア、ギリシアとの間で勃発

（４）　HAUPT, Georges ; «Jaurès à la Réunion du Bureau Socialiste International des 28 et 29 Octobre 1912». *Bulletin de la Société d'études jaurésiennes*. No. 11, octobre-novembre. 1963. p. 6-7.

した。この戦争で敗れたブルガリアは1913年８月10日のブカレスト講和条約によってマケドニアの大部分をセルビアとギリシアによって奪われた。

第２次バルカン戦争の結果、ロシアとセルビア側がバルカン半島で優位に立ったが、伝統的にロシアの同盟国であったブルガリアはオーストリア－ハンガリー二重帝国とドイツ帝国、イタリアの三国同盟の側に接近し、一方セルビア、ルーマニア、ギリシアは協商国の側について、バルカン半島は一触即発の状況になり、サライエヴォ事件を契機に第1次世界大戦への途を突き進んだ。

第２インターナショナルの内部で反戦平和の立場をあくまで追求しようとしたフランス社会党 SFIO 多数派であるジョレース－ヴァイアン派とイギリス労働党のケア・ハーディたちは、バルカン半島での戦争がヨーロッパ全体の戦争に拡大することをくい止めるための最後の手段として、次回インターナショナル大会でヴァイアン－ケア・ハーディ決議を採択させ、軍需部門のゼネラル・ストライキによって国際仲裁に訴えることを追求した。

ところで1913年にウィーンで開催されることがコペンハーゲン大会において全体一致で決定されていた次回インターナショナル大会は、オランダのファン・コル VAN COL の提案で第２インターナショナル50周年を祝賀するという名目で1914年８月に延期することが提案された。しかし本当の延期を求めた理由はドイツとチェコの党の対立を表面化させたくないというドイツの党の思惑をオランダの党が配慮したことにあった。この事情を国際社会主義事務局 BSI 執行委員会も知っており、事務局議長のヴァンデルヴェルドは妥協策として1912年にバーゼルでインターナショナルのヨーロッパの党だけによる協議会を1912年10月28日にブリュッセルで開催された国際社会主義事務局 BSI 総会において提案し、イギリスやフランスの党からの猛反対にあった。しかしこれを受けたジョレースはヨーロッパの党だけによる協議会ではなく、世界全体の党が参加する臨時大会をバーゼルで開催することを条件に、1914年８月に第９回ウィーン大会開催を延期することを認めた。この1914年８月に第１次世界大戦が開戦するとはむろん誰も予知することはでき

なかった。この幻の大会となったウィーン大会の委員会への報告と各国支部の活動報告の多くはインターナショナル大会の公式言語である英語とドイツ語とフランス語で印刷されている。

本稿で取り扱う1913年と1914年は第1次世界大戦にヨーロッパ世界と世界全体が突入する危機の時代であった。1912年のアガディール事件、いわゆる第2次モロッコ事件を契機に世界大戦が現実化する可能性がにわかに高まった。上記の2回にわたるバルカンでの戦争は世界戦争が目前に差し迫ったことを如実に示すかのように、ドイツとフランスの両国の間で本格的軍備拡大の競争が開始した。1913年にフランス議会で3年兵役法が通過したことによってドイツとフランスの関係はいっそう緊張していく。

第1章　フランス社会党SFIO第10回ブレスト大会（1913年）

1913年はフランスにとって3年兵役法の年となった。1月17日に対独強硬派のレイモン・ポワンカレRaymond POINCARÉが大統領に選ばれ、同月21日に成立した第3次ブリアン内閣は3月6日に代議院に3年兵役法を上程した後で3月18日自ら首相を辞任して、3月22日にルイ・バルトゥLouis BARTHOUが新内閣を組閣した。

フランス社会党SFIO第10回大会は1913年3月23日、24日、25日の3日間ブルターニュのフィニステール県ブレストBrest市で開催された。代議院での審議は6月2日に開始される。代議院に3年兵役法案が上程され、ブリアンにこの法案成立を任されたバルトゥ新内閣が樹立して間もなくブレスト大会は開かれた。代議院の陸軍委員会での3年兵役法の審議に参加するために、そして新内閣の信任投票が控えていたためにジョレースは大会を欠席しており、ゲードが病床に伏せているためにアルベール・トマは代理で予算委員会に出席しており、ジョレース、ゲード、サンバ、トマという党にとって重要なメンバーが欠席している中で、3年兵役法に関係する重要な議題がこ

の大会で審議された。そして審議と議論に際して重要な役割を果たしたのはヴァイアンであった。

議会に上程されて間もない３年兵役法については「３年法と軍備 La Loi de trois ans et les armements」という議題で大会２日目の午前の部に大会での議論は開始される。口火を切ったのはゲード派の農業問題の専門家コンペール－モレル COMPÈRE-MOREL（代議院議員）であった。彼は発言する。

「同志諸君、ブリアン氏の反動的政府が兵役の延長を要求すると直ぐに社会党議員グループと常任執行委員会は全国で力強い行動を展開しました。議会の社会党議員グループはエティエンヌ氏（陸軍大臣―筆者注）が提出した法案に対して相応の反撃する対応を行いました。常任執行委員会は多数の県連合とともに全国でこの狂信的愛国主義と軍国主義の反動的法に抗議するために一連のデモンストレーションとミーティングと公共集会を組織しました。あなた方が知っての通りにあらゆる国際的紛争の仲裁を要求し国民民兵制度を確立し２年兵役制度とフランスとドイツの友好を維持する宣言を出しました。また大会事務局に私が読み上げる議論の基礎として役立つ動議を提出してこれに応えました[(5)]」

こう述べた後に動議を読み上げた。

「第10回労働者インターナショナル・フランス支部 la Section française de l'Internationale ouvrière（フランス社会党―筆者注）大会は軍備増強と３年兵役法の採択が国民と社会によってナショナリストと狂信的愛国主義政策の明白で特徴的な証明であると確認する。／国民防

（５）　Parti socialiste SFIO. *10e Congrès national, tenu à Brest les 23, 24 et 25 mars 1913 : compte rendu sténographique*. Paris. Au Siège du Conseil National. 1913. pp. 238-239

衛を保障する唯一の手段は国民全体の武装による民兵を創設することであり、兵役の短縮がこの途への第１歩であり、若い兵士の兵営への拘留の延長はこの途の否定であると考えて、／国民にとって危険であり諸国民の経済的社会的生活にとって致命的である武装した平和によってもたらされた負担は、発達し強固になった仲裁がその消滅が資本主義制度自身の消滅にかかっているあらゆる国際的紛争を解決することでしか減少させることができないこと考慮して／ドイツとフランスの２つの大国は忠実にしかも公に確認された合意によって平行してかつ同時的に軍縮の口火を切ることができることにかんがみて／大会はドイツとフランスの社会主義政党の共同行動をみずから賞賛し、アルザス－ロレーヌの住民全体の願いを代表していかなる手段によってもフランスとドイツを戦わせる復讐を望まないと明確に表明するアルザス－ロレーヌの社会主義者と連帯する。／（大会は）社会党議員グループと常任執行委員会 CAP に議会と全国で最も勢力に満ち最も断固としたフランスとドイツの協調と国際仲裁と国民民兵を支持し３年兵役法に反対する行動を行うことを委任する[(6)]」。

このコンペール－モレルの動議朗読の後にヴァイアンが発言して、まずこの動議を強く支持してこれが党全体で実践される必要があると強調した。そして社会党のみが３年兵役法に反対しており、これは社会主義だけではなく国民全体の利益を代表しており、戦争と帝国主義的軍国主義に反対する闘いは多くの国民の支持を得ることができると主張した。その後で彼は文明と進歩を支えるフランスとドイツとイギリスの３国の親密な同盟によって反動的で国粋主義的なブルジョアの支配を民主的で平和な政策に移行することができるのに、今のフランス政府はツアーリ（ロシア皇帝―筆者注）とパンスラブ主義の命令の下におかれていると非難した。フランスは平和主義政策を求

（６）　*Ibid.*, p. 239

めているのに「我が国の政府の行為によってフランスはツアーリの政策の手先と共犯者になっており、その政策によって我々は新たな軍備と忌まわしい３年兵役法を押しつけられています。現在オーストリアとロシアの２つの帝国主義の紛争によって世界平和が脅かされているなら、フランスはロシアの共犯者となって現時点で多分世界の平和を脅かしている紛争の咎を負っているのです[7]」と述べて３年兵役法制定の動きの背景にはロシアがいるとして「そしてもしツアーリズムに仕えるこのフランスの政策が３年兵役法に導いているとするならば、３年兵役法は不可避的に近いうちに戦争へと行き着かせます。この法律はドイツとの戦争へと駆り立てます[8]」と指摘し、その解決策はフランスとドイツの和解であると主張する。そのためにも第３の構成員であるイギリスの社会主義政党とフランス、ドイツの社会主義政党との協力関係が求められていると強調する。さらに「（フランスの）フェズへの進軍がアガディールでの（ドイツの）砲艦パンターの派遣を呼び起こし、トルコ再生の努力の最中に決定されたフェズへの進軍が、トルコに対する敵対と略奪の動きを始めさせました。イタリアのアフリカ出兵ともっと後でオーストリアのボスニアとヘルツェゴヴィナ併合の後で最終的結末としてロシアの画策でバルカン戦争が起きました[9]」としてフランスのモロッコでの帝国主義政策を批判する。最後にヴァイアンは軍国主義の軛のもとにある常備軍から抜け出して民主的で防衛にのみ用いられるスイスの民兵制度をフランスに取り入れ外国からの侵略に備えることを推奨した。

つぎに発言した党内極左派のギュスターヴ・エルヴェは、ヨンヌ県連合の動議を提案した。その動議は次のように言う。

「フランス国民は何が争点であろうとも復讐はアルザスとフランスとドイツと文明全体のいずれにとっても大惨事になるであろうと予想して

（７）　*Ibid.*, p. 243
（８）　*Ibid.*, p. 243
（９）　*Ibid.*, p. 245

／アルザス－ロレーヌ問題がフランスとドイツの緊張の唯一の本当の原因であり、両国の間の和解の唯一の障害であると考え／アルザス－ロレーヌの住民の3つの政党の声としてアルザス－ロレーヌを復讐戦争によってドイツから解き離そうとのぞむ考えを断固として断罪するとミュルーズで公式に宣言したことにかんがみ／アルザス－ロレーヌの住民は極めて明確に彼らの共和国憲法の下に完全な自治しか、すなわちアルザス－ロレーヌ議会にたいして責任がある大臣たちによる自治とドイツ帝国の自治領邦国家のような連邦議会への代表派遣しかのぞんでいないと宣言したのにかんがみ／憲法が1911年にアルザス－ロレーヌに認めた普通選挙による州議会 Landtag は自治による共和政的な憲法につながる途であることにかんがみ／最後に、問題をかきたててきたアルザス－ロレーヌ問題のこのような解決策は自由に自らについて決定する国民主権を布告したフランスの革命的法に適合していて、このようなことは現在では普通選挙によって認められた投票が表明したアルザス－ロレーヌ住民の自由な意志であることにかんがみて／社会党・労働者インターナショナル・フランス支部は議員グループに3年兵役法に対する返答としてフランス政府に以下の基礎に基づいてドイツ政府と和議を結ぶ交渉に着手することをもとめる。

1°　復讐戦争を公式に放棄するかわりに、ドイツ連邦国家内部での共和政憲法による完全な自治

2°　軍備の制限

3°　両国の法律に両国間に今後起こりうるあらゆる紛争解決についての例外のない義務的な仲裁を明記すること

大会はフランス国民の世論に向けて3年兵役法に反対する行動を利用することを、民兵を支持することを提起し、ヨーロッパの世論全体に対してアルザス－ロレーヌ問題と、ヨーロッパの軍縮の問題の鍵となるフランスとドイツの和解の問題から利益を引きだすことを決定する。」(10)

そしてエルヴェはアルザス－ロレーヌの３政党の要求を支持した。エルヴェは次のように言う。

「私は『社会戦争 *La Guerre sociale*』紙で、私が受容でき、私がフランスとドイツの和解にいたらせる性格を持つと考える解決策として次のような解決策を提案しました。ドイツ民族でありドイツ語が使われるアルザスは自治領となるでしょう。フランス民族でフランス語とフランス文化の国であるロレーヌはアフリカ植民地と引き替えにメッス（の防壁）を取り壊してフランスに戻るでしょう。私は提案しながらこの解決策に難しさを見いだしたのは、ロレーヌには多数のドイツ人移民がいるからであり、ロレーヌは工業が大いに発展してる地方であり、現在国境の向こう側と経済的利害関係を持っていることを完全に考慮に入れたからであります。私はこの解決策の沢山の困難を検討しましたが、しかし私はこの解決策が最善であるか最も害悪が少ないものであり、精神的満足をあたえるという巨大な利益をもたらしますが、一定数の民主主義者に精神的満足を与えることをしようとしない我が国粋主義者（ナショナリスト）やロレーヌの乱暴な併合を考えている愛国者に訴えようとはしません。42年前のロレーヌの併合は、諸国民の権利とフランスの革命的権利に対する侵害でありました。しかし２か月前から、私がこうしてこの問題を提起してから極めて重大な新しい事態が生まれました。1911年から帝国議会選挙で普通選挙をあたえられたアルザス－ロレーヌの人々が、旧プロテスタントの政党が多い彼らの３党の州議会での選挙で投票で我々に次のことを示しました。第１に彼らが我が復讐主義者たちの復讐戦争なるものに反対し、第２に彼らがフランス人に戻ることを要求せずに、彼らが経済的利害関係を持つドイツ連邦国家の中にとどまって自治をのみ要求するが、特に共和政体で自ら統治することを要求し、彼ら

（10）　*Ibid.*, pp. 255-256

は現時点で議会に要求したのですが、その議会は皇帝を代表する統治者が首長であり皇帝がドイツ帝国議会に責任がないように、その首長はアルザス－ロレーヌ議会にも責任がありません。彼らは共和国の自治を、すなわち彼らの自治共和国の大統領とともに議会の責任制を、普通選挙制で選挙された彼らの責任を有する大臣たちを要求したのです。これはアルザス－ロレーヌにとっての自治であり、アルザス－ロレーヌが自らを統治することです。(11)」

エルヴェは両手を挙げてアルザス－ロレーヌ議会３党の自治の要求に賛同したのであった。労働者は祖国を持たないと主張するエルヴェにとって、ブルジョア政府が統治するフランスにアルザス－ロレーヌが戻ることは重要ではなかった。

しかしルノーデルによって、エルヴェが言う宣言はアルザス－ロレーヌの３党によるものではなくアルザス－ロレーヌの社会主義者によるものであるとの指摘を受けた。

これに対しエルヴェはアルザス－ロレーヌが戦争によるフランス復帰をのぞんでいないことは間違いないと抗弁した。

議論は３年兵役法にもどって、アルザス－ロレーヌ問題が解決されれば戦争の危機が回避されるのではなく、２次的な問題である。モロッコでのドイツとフランスの対立は資本家たちの経済的強欲によってもたらされており、何よりも焦眉の問題は３年兵役法に反対する運動の組織化であるという意見が多数出された。

３年兵役法についての議論と審議は大会第１日の午後にも継続された。ブレスト大会は議員たちが３年兵役法に緊急に対処するために24日大会第２日で打ち切られて、直ちに行動に移らなければならなかった。1914年の総選挙にむけて農業問題についての審議が予定されていて、農村部の県連合からは

(11)　*Ibid.*, pp. 256-258

農業問題についての審議を求める声もあがったが、議員たちが３年兵役法の審議に参加するためにパリの議会に出発せざろう得ない状況と、その他の活動家も３年兵役法に反対するプロパガンダを開始しなければならない緊急な状況が最終的には受け入れられて、ブレスト大会は第２日月曜日３月24日午後の会議をもって終了することになった。

第２章　1914年１月25-28日のフランス社会党 SFIO 第11回アミアン大会

1914年は８月冒頭に第１次世界大戦に世界大戦が勃発する年であることは周知の通りである。この世界全体にとっての大惨事がおこったこの年にはフランスでは４月26日・５月10日に総選挙が行われる予定であった。1914年の総選挙に向けて、フランス社会党 SFIO 第11回全国大会は１月25日から28日の４日間アミアン市の市立男子小学校屋内体育館 Préau de l'École des garçons で開催された。８年前にフランス労働総同盟 CGT の大会が開催され「アミアン憲章」が採択された同じ場所であった。

第１節　1914年フランス社会党 SFIO アミアン大会：１月25日大会第１日の審議

この大会の議事日程によれば１月25日大会第１日の会議の冒頭ではドイツ社会民主党 SPD のムラーMULLER とベルギー労働党のヴォウテルス WAUTERS とチェコ－スロヴァキア社会民主党のフーベック HUBECK の挨拶の後に、通例通りの大会第１日に全国協議会と議員グループと報告が行われ、その後の審議は１月26日第２日午前と午後ならびに同月27日第３日午前と午後の会議で長時間「選挙戦術 tactique électorale」の議論に費やされた。(12) 1914年の総選挙は前年の1913年に３年兵役法の通過を許しただけに、

(12)　Parti socialiste, Section française de l'Internationale ouvrière, *11e Congrès national, tenu à Amiens les 25, 26, 27 et 28 janvier 1914. Compte rendu sténographique*. Paris

勢力を挽回し可能ならば3年法の廃止までを党は目指そうとした。

統一社会党結成からこの1914年アミアン大会までの全国協議会報告で注目するべきは、第1に党員数の推移への強い関心である。これはフランス社会党SFIOのような大衆政党にとって党の規模を拡大していくことは極めて重要な課題で、党活動費が党員によって支払われる党費に負っていることからも無視できない問題である。財政を支える党機関紙の定期購読者数の拡大も全国評議会は同じ理由から重視している。勿論財政的理由ばかりではなく党のプロパガンダ活動で機関紙は大きな役割を持っていることは言うまでもない。しかしフランス社会党が党機関紙について抱える矛盾は、党規約で党機関紙と定められていた元ゲード派機関紙であった週刊の「ル・ソシアリスト」紙の購読者が少なく1913年9月からは単なる月刊党内公報紙Bulletin mensuelとなり、恒常的に3万部近くが購読されていた日刊の「リュマニテ」紙が事実上の党機関紙となって大会でも経営と管理について報告され、管理委員会も選挙されていたことである。第2に選挙結果に対して全国協議会が強い関心を抱いていたことは大衆政党として当然ではあるが、つねに「階級闘争」を重視して、議会主義に傾斜しすぎることを常時警戒していた同党からすれば、その関心の比重は極めて高いように思われる。全国評議会は選挙の年特に代議院議員総選挙と地方議員総選挙の年には党員の増加が他の年に比べて著しかったと評価している。

今回の議事録には初めて住民1000人につき何人の党員が各県連合に存在したかの資料[(13)]が公表されている。

この資料によれば住民当たりの党員数が多いのは第1位がノール県連合で6.5人でノール県連合と並んで党の二大拠点であるのは当然であるが、セーヌ県連合が第11位の2.9人であることがわかる。第2位はガール県連合、第3位はオート－ヴィエンヌ県連合で、第4位がオーブ県連合、第5位がヴォクリューズ県連合、第6位がヴァル県連合と南フランスの県連合が続いてい

Au siège du Conseil National. 1914

(13)　*Ibid.*, pp. 23-25

る。南フランスでの党の組織率が高かったことが判明する。南フランスは最大拠点のノール県のような工業地帯ではなく、小農民と小生産者の人口当たりの割合が高く自立した小農民や小商工業者からなる小生産者たちの民主主義への志向が強く、伝統的に急進主義の地盤となっていた地帯である。純粋な「プロレタリアート」ではない彼らは改良主義的社会主義の傾向が強く「ミルラン入閣問題」が起きた際には大挙入閣を支持した。

ちなみにジョレースのタルン県連合は36位で、1.3人であった。73県連合・地方連合のなかではちょうど中ほどを占めていて、予想されるよりも低い。下位を占めるのは西部ブルターニュ地方や南西部ピレネー地方の県連合が多い。党の影響力が強いトゥルーズが所在するオート・ガロンヌ県連合でさえ33位である。

党員数の拡大が停滞したり減少したりした地帯の中に1913年の反３年兵役法でプロパガンダと運動が強力に推進された県が含まれているのは、運動が終息した後での新党員の徴募が十分に行われなかったという結論に全国評議会は到達した。しかし1911年総選挙で社会党に投票した有権者は110万人で、全フランスの労働者数は200万人いるのに社会党の党員数はこのアミアン大会の時点で７万２、３千人であることをドイツの党と比較して残念に思っていた。

国際社会主義事務局 BSI 代表のヴァイアンの報告は、イギリス労働党のもとでの社会主義の統一が進んでいること、1914年に予定されているウィーン大会の準備が着々と行われていること、フランスの代表からフランス政府がトリポリタニア占領を行ったイタリア政府への支持を行っていると報告されたことなどが報告されている。(14)

(14)　*Ibid.*, pp. 133-135

第2節　1914年フランス社会党SFIOアミアン大会：1月26-27日大会第2-3日の「選挙戦術」についての審議

1月26日大会第2日と1月27日大会第3日の午前と午後を費やして「選挙戦術」についての審議が行われて、白熱した議論が行われた。このアミアン大会は「選挙戦術」一色に塗られた大会であったかのような観を抱かせる。当然選挙とは1914年の代議院総選挙であった。

基調報告はゲード派の農業理論専門家であるコンペール-モレルによって行われた。議会主義を批判するゲード派の彼にとっての総選挙はプロパガンダと党員徴募の場であるとされる。彼は3年法を否定して2年兵役法に復帰するために総選挙は戦われなければならないと主張する。また税制での累進制による所得税法の実現を目指さなければならないと言う。世俗的（非宗教的）学校の擁護と発展も大きな課題であるとする。つぎにシャロン大会での共和主義的規律、すなわち第2回投票の際には第1回投票で社会党よりも多数の票を得た左翼の候補に投票することを求めた。最後に普通選挙ではなく間接選挙で選挙される元老院を廃止しなければならないと訴えた。

最初にロワール-アンフェリウール県代議員のブリュネリエールBRUNELLIÈREが発言して半分は農村地帯であるフランスでは農業綱領の作成が必要であると主張した。

同日午後の部の審議ではマイユMAILHESは比例代表選挙制度を支持することをもとめ、ノエル・アルディNoël HARDYは3年法に反対した候補にのみ立候補辞退（デジストマン）を行うべきであると主張した。ヴァイアンは比例代表選挙制を支持。アレクサンドル・ヴァレンヌAlexandre VARENNEは一律に社会党より多い得票を得た急進社会党候補を支持して立候補辞退を行うことをもとめ、ヴァイアンは選挙区に任せるとしたシャロン決議を社会主義的規律として擁護し対立した。ヴァレンヌは共和主義的規律を守ることと比例代表選挙制への加担を維持することの両者を求め、ヴァイアンは比例代表制を選挙綱領からはずすことを求めた。エルヴェは戦争を受け

入れるよりは武装蜂起を行うべきであるとして左翼勢力の団結を求めた。[15]

最終的に選挙戦術についての大会決定は大会第４日目午後の会議で、ジョレースが決議委員会の報告[16]として大会に提案して、全体一致で採択された。

その主要な内容は以下の通りである。

「未だ比例代表制によって思想と綱領と政党による非個人的闘争によって選挙戦を行えない現状で、維持された郡投票（郡単位での単一定数選挙－注筆者）は政治家の最悪の策略と策謀に自由な活動の場をあたえる[17]」として郡選挙制度を非難しながらも選挙戦の場として受け入れている。労働者の立場に立ち階級闘争を行う社会主義の党であると自らを定義して、特にブリアンの政治を弾劾している。

「社会党は昨日も今日もフランスの独立と平和を武装した国民の組織化によって保障することが出来る、全面的に断固として闘う唯一の党である。真底愚かしく忌まわしい法としてばかりでなく、結果として象徴として反知性的で反動的で残虐な政策であるとして３年法と闘う。ベルン（国際平和事務局によるジュネーヴ平和大会―筆者注）での成果に始まるバーゼルでのインターナショナルのアピールに応え、自らはあらゆる国のプロレタリアの共通の成果に貢献し、世界平和の条件であるフランスとドイツの決定的協調を可能とするこの仏独和解のために努力してヨーロッパの対立の根元にまで社会党はたどり着こうとのぞんでいる[18]」とのべてフランスとドイツの和解を選挙綱領に挙げる。

選挙制度改革を軍国主義的略奪的反動として悪用している策略を防止して「本当の全面的比例代表選挙の成功を保証する努力を強化する」として比例代表選挙の実施のために元老院の廃止のために尽力すると謳い、「第１回投票では自党のプロパガンダと全面的教義と完全な綱領を行う自党の候補を各

---

(15)　*Ibid.*, pp. 178-213

(16)　報告の全文は *Ibid.*, pp. 424-427 参照。

(17)　*Ibid.*, p. 424

(18)　*Ibid.*, pp. 425-426

選挙区に立て第2回選挙では第1回投票を持続させて軍国主義的反動をくじく候補に勢力を傾注する」として、シャロン大会動議にしたがって常任執行委員会の指導下で県連合の責任のもとに暗に3年法を支持し世俗化と平和を支持する候補と闘うことを強調する。(19)

選挙戦術については結果的には第2回シャロン党大会での決定、すなわち党執行部である常任執行委員会の指導の下に各県連合が第2回投票で自党の候補者を維持するか、立候補辞退（デジストマン）するかを決定するという現状維持で選挙戦を闘うことが決められた。このジョレースの報告では比例代表選挙の支持と元老院廃止のための憲法改正を提唱するだけにとどまり、累進的所得税制や農業綱領など選挙綱領の内容については取り上げられなかった。議題にある通りに「選挙戦術」をめぐっての論争が行われたのである。

1914年総選挙での選挙結果は27議席増加させて102議席（得票率16.97％）を獲得し統一社会党SFIOの圧勝で終わった。この総選挙で与党の急進共和・急進社会党も46議席を増加させて192議席（得票率32.61％）を得た。

第3節　1914年7月15-16日の社会党SFIOパリ臨時大会と第1次世界大戦の開戦

総選挙での左翼の躍進にもかかわらず、3年兵役法は廃案に出来ず、セルビアとオーストリア－ハンガリー帝国の対立によってバルカン半島での緊張は高まり、1914年6月28日のオーストリア－ハンガリー皇帝権継承大公フランツ・フェルディナントと妻が暗殺されたいわゆるサライェヴォ事件で破局へと向かう。サライェヴォ事件勃発当時は直ぐには世界大戦に発展するとは考えられていなかった。バルカン半島でのこうした事件は頻発していたし、オーストリア－ハンガリー帝国皇帝フランツ・ヨーゼフ1世は健在でフランツ・フェルディナント皇帝権継承大公は父の死によって叔父の皇帝からの継承権を手にしたが、名門ではない妻ゾフィーとのいわゆる「貴賤婚」によっ

(19)　*Ibid.*, p. 426

て皇帝から子どもの皇位継承権は与えられなかったという、ある意味で皇室からは歓迎されない皇太子であったことも影響している。パリの世論はサライェヴォ事件よりは「フィガロ」紙社主カルメットを殺害した元首相カイヨーの妻の裁判の話でもちきりであり、ドイツ皇帝ヴィルヘルム２世がヨットでヴァカンスに出かけたことを知って人々は胸をなで下ろしていた。[20] 世界大戦に突入するのではという恐怖が人々の胸をよぎるのは特に７月23日にオーストリアが最後通牒をセルビアに突きつけた後のことである。

それでもフランス社会党 SFIO はパリで1914年７月15日に臨時大会を開いて、ヨーロッパ的規模世界的規模での大戦が開戦を阻止するための対応について議論した。この臨時大会の正式議事録は出版されていないので、この臨時大会の議論については「ユマニテ」紙の報道による。

パリでの臨時全国大会は７月14日の午前10時に開会されて、午前の会議は外国からの諸政党の代表が連帯の挨拶をした。

ベルギーからはアンセーレ ANSEELE とヴォウテルス（リエージュ大学教授）が、イギリスからはブルース・グレイザー Bruce GLASIER、フランク・スミス Frank SMITH、ケネディ KENNEDY が、ロシアからはプレハーノフ PLEKHANOFF とルバノヴィッチ REBANOVITCH が、ドイツからはカール・リープクネヒト Karl LIEBKNECHT とジョルジュ・ヴェイル Georges WEILL（アルザス－ロレーヌの帝国議会議員）が、オランダからはフリーゲン VLIEGEN が、イタリアからはアレッサンドリ ALESSANDRI とレポッシ REPOSSI が参加した。ベルギー労働党を代表してアンセーレが、ロシアの党を代表してプレハーノフが、オランダを代表してフリーゲンが連帯の意思を表明し歓迎を受けた。[21]

午後の会議は生活物資の物価高についての議論から始まり、コンペール－モレルが議長を務め彼がこのテーマについて報告を行った。彼によれば19世

---

(20)　DUROSELLE, Jean-Baptiste ; *La France et les Français. 1914-1920*. Paris. Éditions Richelieu. 1972, p. 59

(21)　*l'Humanité, le 15 juillet 1914*, p. 6

紀末以降賃金は急上昇したが、物価はこれを上回って上昇したという。軍備拡大と農村からの人口流入が二大原因であると指摘しプロレタリアートを苦しめており、救済方法は生産と分配の組織化であると言う。この見解について議論が行われた後で、最終的にガール県連合とセーヌ県連合の動議が決議委員会に送られることが決められた。次に午前の会議でプレハーノフとルバノヴィッチから暴露されたロシアの監獄の惨状について弾劾する決議がセーヌ県連合から提出され、同じく決議委員会に送られた。３番目には失業について議論が行われ、この問題についてもセーヌ県連合の動議の内容の説明が行われた後に、ヴァイアンが発言して、失業は資本主義が必然的に生み出すが、これと闘うためには労働者の組織化が必要であると発言した。このあと決議案は決議委員会に送られた。アルコーリズムについてもまたアルコールの専売制度と小売りの制限を謳ったセーヌ県連合の動議が出されたが、ゲードが反論して小売りの制限は有効ではないと主張した。この日の会議の最後にこの大会には79県連合・地方連合の158人の代議員が出席し、議決権総数は2,908票であるとの報告があった。(22)

大会第２日目７月15日の会議については「ユマニテ」紙７月16日号による。同紙の記事には次のように書かれている。

「代議員たちは最も微妙で本当に白熱を帯びた議題から始めた。議論の最中に生じた活発な議論は他ならぬ重要な問題である帝国主義についてであった。大会事務局はラマディエとフロッサールに補佐されてドゥロリが務めた。会議が開始されるとコンペール－モレルが壇上に立った。議論したのはケア・ハーディ－ヴァイアン修正案についてである。その修正案は『大会は労働者のゼネラル・ストライキが、とりわけ戦争に手段を供給する産業（武器、軍需品、交通など）でのゼネラル・ストライキがことのほか有効であると考える』と言う。コンペール－モレル

(22)　大会第１日午後の審議については *Ibid.*, p. 6 参照。

の演説。コンペール－モレルははじめに言う。社会党員全員は帝国主義と戦争と闘う決意を固くしている。社会党員は同様に戦争が資本家の強欲が実らせた現在の社会状況の果実であることを認識している。彼は言う。『私たちは死者を生み出す予算を与えないためにブルジョア国家の予算に反対投票をしています。私たちは国際的示威運動を組織して、仲裁をもとめており、これらはすべて帝国主義と戦争に反対するためです。これらの手段には皆が賛成しています。しかし革命的手段であるほかの手段については、たとえばセーヌ県連合の推奨するゼネラル・ストライキについて私たちは見解を異にしています。ところで防衛戦争と侵略戦争という２つの種類の戦争があります。万が一前者の場合であれば、全員国民的民兵組織に同意しているではありませんか。しかるにこの性格の戦争の場合にゼネラル・ストライキを行うのでしょうか。もしそうであれば、なぜ民兵を要求したのでしょうか。選挙期間と議会で言ったことと同じ言葉を言う必要があります[(23)]』」

ゲード派のグループに所属するコンペール－モレルはここでもヴァイアンの影響下にあるセーヌ県連合やジョレースが支持するケア・ハーディ－ヴァイアン修正案にたいして敵対的であった。「ユマニテ」紙はコンペール－モレルの演説についてさらにこう伝えている。

「発言者はイタリアの同志がトリポリタニアでの戦争に反対したのにモロッコの問題では『フランスでは行わなかった』ことを比べる。『どうして私たちが実施しなかった動議に賛成投票をするのですか。あなた方はウィーン大会（1914年８月に予定されていたインターナショナル大会－筆者注）でゼネラル・ストライキ動議に賛成投票を投じたいとのぞんでいます。すべての各国支部が賛成投票をしたとします。しかし全支

(23)　*l'Humanité, le 16 juillet 1914*, p. 1

部が同じ程度組織化されていません。そこでより組織化されている労働者階級を持つ支部がストライキを行い、ほかが同じ行動を採れなければより進んだ国民は当然ほかの国に壊滅させられます[(24)]』。」

ここでコンペール－モレルが言うより組織化されている国民とは日頃から模範として推奨してきた組織力のあるドイツ社会民主党を持つドイツが組織化の遅れていたロシアに敗れることを恐れていたのであろうか？　遅れている国がフランスでないことは確かなようである。彼は続けて言う。

「さらにどうして海軍兵器廠の労働者や鉄道労働者に戦争に反対するゼネラル・ストライキを言う危険を冒すのですか？　政府側の答えはなんでしょう？　彼らは即座にこれらの労働者を軍隊に編入して、彼らを残りのプロレタリアートと隔離するでしょう。そしてなぜ戦争に反対するすべての手段をもちいるとだけ言わないのでしょう。とりわけ戦争を阻止するあらゆる手段を用いましょう。このほうがずっと良いのです。戦争が布告された時に抵抗するよりも、防止した方がずっと容易に出来ます。セーヌ県連合の動議に賛成投票することは私たちの行動とプロパガンダに甚大な不都合を生じさせます。労働者階級に組織化と自覚した力があるほど、容易に戦争に反対できます。ドイツの数百万の労働組合員とライン河のむこう（ドイツを指す―筆者注）の我が仲間たちの強力な組織は我が国の聞こえの良い決議よりもドイツの政府指導者に圧力を与えます。本当に有効な戦争に反対する手段はプロパガンダと組織力という国内での努力であります[(25)]」

こう述べてコンペール－モレルはゲード派が模範と仰ぐドイツの党のような組織力によってこそ戦争に反対できるとして、ゼネラル・ストライキを唱

(24)　*Ibid.*, p. 1
(25)　*Ibid.*, p. 1

えケア・ハーディ－ヴァイアン修正案に賛成するセーヌ県連合の動議に猛然と反対した。ゼネラル・ストライキと手段を明確するのではなくあらゆる手段を用いるというのが1907年インターナショナル・シュトゥットガルト大会の決議であったが、それではあらゆる手段にゼネラル・ストライキは含まれないのかという疑問が生じる。しかし手段について明言しないことで政府の弾圧を免れるというのがベーベル以来のドイツ社会民主党 SPD の立場であった。

次に演壇に立った元ヴァイアン派のポール・ルイ Paul LOUIS は当然のことながら手段を明確化しないコンペール－モレルの主張に反対した。そして防衛戦争と侵略戦争の区別に疑問を投げかけ攻撃を受けたならばどうするのかとコンペール－モレルに問いただした。攻撃に反対してゼネラル・ストライキをするのがインターナショナルの立場であるとした。モロッコ問題でもフランスでは激しい抗議運動があったことを指摘した。仲裁については資本主義国家の外交に社会主義の外交を対置して次第にプロレタリアートは仲裁を強く求めることを主張した。(26)

３番目にノエル・アルディがセーヌ－エ－オワーズ県連合を代表して発言し、ゼネラル・ストライキに賛成した。交戦国の両方でゼネラル・ストライキを行うべきで、そうでなければ攻撃を受けた側が防衛するのだと主張する。そしてフランスとドイツとの和解を唱えた。(27)

議論はしたいに白熱化していく。午後の会議ではヴァイアンは資本主義国家が世界平和の脅威となっていることを警告し、資本主義国家が帝国主義傾向を持つ中でプロレタリアートは力を強めより強力な手段で戦争に抵抗できるようになってきており、ウィーン・インターナショナル大会でケア・ハーディ動議を採択する希望がある。ドイツではゼネラル・ストライキを支持する声が広がっており、ベルリン連合の大会でローザ－ルクセンブルクの動議が支持を拡大しており、指導部の中でもゼネラル・ストライキの主張が広が

(26)　*Ibid.*, p. 1
(27)　*Ibid.*, p. 1

りを見せていると指摘した。そしてヴァイアンは続ける。

「私たちはウィーンの決議にゼネラル・ストライキを明示しないわけにはいきません。なぜならシュトゥットガルト大会で私たちは言うべきことをすべて言いました。コペンハーゲン大会で私たちの動議を補強しました。私たちの力量は現在直面する脅威を前に増大しました。私たちは最後まで到達しなければなりません。[28]」

次に演壇に立ったラポポールはヴァイアンの演説を支持してケア・ハーディ－ヴァイアン決議に賛成投票をすると明言した。軍国主義の主要6か国の巨大な経費が改良的成果を阻害しているかを指摘し、最後に国際的大殺戮に反対すると演説した。[29]

ジョレースは演説の最初で帝国主義の定義に触れ、古代ローマの征服的拡張的性格から起源しているが、現代では資本主義の強さを意味しているとして次のような発言をした。

「今日において資本主義の植民地政策はそのあらたな力が強まったことに由来しています。賃金労働者の消費の弱体性からくる大量生産による広範な商品販路が必要となって商品販路の征服に取り組み、その紛争のリスクは高まっています。そしてその危険はひたすら私たちに近づいている。アフリカとアメリカ大陸で起きていることは、諸国民間の小さな紛争も公衆の反応の第一線にある報道によって伝えられます。国王たちが敵対していた15世紀や16世紀ははるか昔のことになっており、ほかの国民が知るまで1年かかりました。その一年間は平穏でした。今日では電報がその時起きている紛争をすべての国民に伝えます。経済発展を特徴づけるのはその中に高慢さと自尊心の精神が宿っていることです。

(28)　*Ibid.*, p. 6
(29)　*Ibid.*, p. 6

ドイツが統一を成し遂げるのに専念し、フランスが国内の懸案で支配されていた頃は、これらの２国民は彼らの行動自体に営みを十分に見いだしました。しかしリスクは変化しました。現在ではもはやリスクは国民内部の紛争ではなく、対外的紛争に存在しています。」「プロレタリアートの力が増大すると彼らの組織に相応する現代的手段が必要になります。危険に対して総力を使うでしょう。国内の実力行使と議会の活動で危険を断罪するでしょう。しかし戦争の暗雲が姿を現す時、労働者たちは嵐に脅かされるので、彼らが強力な勢力であり平和への意志を強く確認することを思いおこさずにはいられません。そして実際理論的不一致にもかかわらず労働の停止は支配者をゆさぶり、警告する手段であることで私たちは意見が一致しています。すべての国でとある危機に際して労働者たちがゼネラル・ストライキに訴えることができるのであれば、戦争に反対してこの手段に訴えないわけにはいきません。ところでストライキは自然発生的に起きます。事前に受け入れられたやり方に反してスペインの労働者はモロッコでの暴挙に抗議し、ロシアの労働者は日露戦争に反対して立ち上がり、イタリアではプロレタリアートがトリポリタニア攻撃に反対して立ち上がりました。ゼネラル・ストライキはこうして混乱の中で起きるものか、この突発現象は戦争が起きた場合に国際的連携なしに生まれるのか、そして戦争がそれを組織化する可能性をもたらすのか否か、ゼネラル・ストライキが予防的に戦争に反対して用いられるかを知ることが重要になります。[30]」

ジョレースはこう述べてゼネラル・ストライキがすでに多くの国で戦争に反対して行われている実例を列挙し、インターナショナルもこの手段に訴えて戦争を阻止するべきであると主張した。

この後でケア・ハーディ－ヴァイアン決議に賛成するマルセル・サンバと

(30)　*Ibid.*, p. 6

反対するゲード、コンペール－モレルなどの議論が続き、最後にかつて党内極左派で武装蜂起主義者のエルヴェがケア・ハーディ－ヴァイアン決議に反対し、かつての教義を捨てて革命的手段を放棄して、改良的手段と仏独和解によって戦争を阻止するべきであるが、アルザス－ロレーヌ問題がこれを阻害していると指摘した。[31] かつての極左派の様変わりは周囲を驚かせた。エルヴェはやがて第１次世界大戦が始まるとショーヴィニスティックな愛国者になる。

７月16日大会最終日第３日目の午後には、前日に選出された決議委員会が決議案を提案したが、多数派と少数派は意見の折り合いがつかなかったために、ジョレースが提案した党内多数派のケア・ハーディ－ヴァイアン決議を支持する議案と、コンペール－モレルが読み上げた同決議案に反対する議案が提出された。ジョレースはゼネラル・ストライキが仲裁をもとめる手段でもあることを強調した。第３日の大会会議を報道する「ユマニテ」紙の第１面の見出しには「社会党大会で帝国主義の問題。戦争を予防し阻止するために、そして支配者に仲裁を課すために多数派は同時に行われる国際的に組織された労働者のゼネラル・ストライキがとりわけ有効であると考えた」と掲げられたが、この見出しこそはジョレースとヴァイアンら党多数派が目指した目標を一言で表現していた。採決の結果ジョレースが提出した多数派案が1,690票、コンペール－モレルが提出した少数派案が1,174票を獲得し、棄権は84票、欠席が24票で多数派案が採択された。[32]

大会第３日は午後に最も重要な「帝国主義の問題」の議決を残して、この日の午前にでは失業と物価高とアルコーリズムについての審議が行われた。失業と物価高とアルコーリズムについては「帝国主義の問題」の議題とともにウィーン大会で審議される議題であったので、このパリ臨時全国党大会で準備のために審議されたのである。

最初にロシアにおける監獄の問題についてのセーヌ県連合の動議が全体一

(31)　*Ibid.*, p. 6

(32)　*l'Humanité, le 17 juillet 1914*, p. 1

致で採択され、同様に失業についての同県連合の動議も異議がはさまれずに満場一致で認められた。物価高についてはジョレースから物価高が賃金を常に追い越しているという事柄についての統計上の問題について異議が出されて、コンペール－モレルが一部手直しが行われた上で次の９項目について決議が行われた。(33)

「1°　消費に対する間接税を、租税転嫁を妨げる立法措置をともなう財産への直接課税に置き換える

2°　公的租税負担を軽減する

3°　農業生産を奨励し発展させる

4°　農地に由来する生活必需物資と農産物輸送の、すなわち生活必要物資（パン、食肉、家賃など）を対象とする課税の税率軽減を要求する

5°　過度の際限ない保護主義に陥らないために農業労働者の正当な利益を保護するため関税を見直す

6°　仲介業者が生産者から最も明確な利益を収奪し、消費者に過剰な負担をかけるのを妨げて、消費者が投機に対する最良の闘争手段のひとつを見いだす生活協同組合を発展させる

7°　農業賃金労働者に対する労働立法を適用して農村人口流出を止め、租税措置で農業生産者の負担軽減をおこない、農業の大事業により食糧品の生産を増大させる

8°　軍備を制限し平和を保障するために出来る限りを行う

9°　疾病者、犯罪者、軽罪犯、精神病者、アルコール依存症者、困窮者の人間的空間を確保するために社会的改良と労働法を最大限実現する」。(34)

---

(33)　*Ibid.*, p. 6

(34)　*Ibid.*, p. 6

アルコーリズムについては賛成1,518票対反対1,192票、棄権8票で大会はアルコール小売業の制限を求めた。午後の会議では前述のように「帝国主義の問題」の議案が採決された。この議案の採決に際して1913年3月13日と30日の帝国議会アルザス－ロレーヌ選出議員のメッスで出された平和の宣言を支持するアルザス－ロレーヌ問題についての議案も提出されて、エルヴェはこれを支持して可決された。こうして3日間に渡るパリでの臨時大会の幕は閉じられた。(35)

第3章　ウィーン大会のための準備作業について

本章の課題は、結局1914年8月に予定されていたウィーン大会は「幻の大会」として第1次世界大戦の勃発によって開催が妨げられたのであるから、残された大会で報告される予定であった報告の文面からこの大会の性格がどのようなものになるはずであったかを推測する作業である。この大会についてジョルジュ・オープトの著書「幻の大会。第1次世界大戦前夜のインターナショナル」(36)によれば、第1インターナショナルの誕生から19世紀末まで労働運動は革命に勝利が間近であるという希望を抱いていたという。しかし革命は直ぐには起こらず、1900年のインターナショナル・パリ大会は「プロレタリアートによる政治権力の征服は…長く困難な組織化の結果」(37)によらなければならないと展望を大きく変えて、社会主義・労働運動は普通選挙制度に基づく議会主義に傾斜して、革命政党は議会制度に統合された野党になったと言う。しかし表面上は1904年のインターナショナル・アムステルダム大会で「修正主義」は退けられて「正統派マルクス主義」が勝利し、1907年のシュトゥットガルト大会ではいわゆる「ドレスデン決議」が採択されてインタ

(35)　*Ibid.*, p. 6

(36)　このオープトの著書の原題は HAUPT, Georges ; *Le congrès manqué.L'Internationale à la veille de la Première Guerre Mondiale. Étude et documents.* Paris. François Maspero. 1965. である。

(37)　*Ibid.*, p. 80

ーナショナルは「階級闘争」の立場に立つとされたが、1909年以降ドイツ社会民主党多数派を主力とする「正統派マルクス主義」と名乗る中道左派は革命的マルクス主義と称する左派から日和見主義であるとの批判を受けるようになる。この修正主義派と正統派マルクス主義派と急進的左翼の相違点は戦術だけであった[(38)]が、1909年以降は「帝国主義」の定義と解釈をめぐって相違は戦略に及んだとオープトは考える。1912年９月に開催されたドイツ社会民主党 SPD ケムニッツ全国大会でヒルファーディングの「金融資本主論 Das Finanzkapital」によって帝国主義が資本主義の本質から生じたとする見解から派生して帝国主義の解釈をめぐって激しい論争が行われ、「修正主義」派のベルンシュタインはこれを拒否し、正統派マルクス主義のカウツキーは「帝国主義」は資本主義の新しい段階であるとした。1913年にローザ・ルクセンブルクが「資本蓄積論」を出版して帝国主義が必然的に戦争を生み出すと主張すると、オットー・バウアーらの正統派マルクス主義者から批判が出される。オープトはバウアーのウィーン大会にむけて準備された報告はローザ・ルクセンブルクの「資本蓄積論」への反論であると見る。

第１節　1913年の国際的環境における小康状態

1913年は緊張が極限までたかまった1911年と1912年に比較して小康状態を迎えた年となり、インターナショナルの中で楽観論が広がった。列強の接近と和解ならびに全面的軍縮に期待が寄せられた。ウィーン大会のために準備された報告の文書にもその楽観的期待が垣間見られる。しかしジョレースは警戒を緩めることがなかった。彼は「初等教育・上級初等教育雑誌 *Revue de l'Enseignement primaire et Primaire Supérieur*」1913年４月13日号に「象徴 *Symbole*」と題する記事で次のように書いている。

「ヨーロッパは数年間このかた戦争は起きなかったが多くの危険な試

(38)　*Ibid.*, p. 82

練に揺さぶられてきたのでほとんど危険というものを信じなくなり、新たに広がったバルカンでの紛争に弱まった警戒心と和らいだ不安で傍観した。しかし物事の真底を見るならば、今ほど危険が重大な時はない。過ぎていく毎日はどうしようもないほどヨーロッパの無力さをあらわにし、無力なうえに信用さえ失墜させている[(39)]」

第2次バルカン戦争によって、バルカンでの戦争が地域的紛争であることが確認されたと社会主義インターナショナルは受けとめた。前年の1912年3月のドイツ総選挙ではドイツ社会民主党SPDが帝国議会定数397議席中110議席と400万票を獲得して勝利し、ジョレースもこの結果を喜んだ。1913年はソルボンヌ教授で社会党員のシャルル・アンドレルがドイツ社会民主党SPDの帝国主義的傾向を批判する「現代ドイツにおける帝国主義的社会主義 *Le socialisme impérialiste dans l'Allemagne contemporaine*」を発表して大きな反響を呼び、3年兵役法反対運動に悪影響を与えると、不安に思ったジョレースが反論した年でもあった。

この1913年はドイツとフランスの和解を求める国際運動が強まった年でもあった。1913年5月11日にスイスの諸政党の代議士が国際社会主義事務局BSIの賛同を得て軍備増強に反対するフランスとドイツの党派を超えた代議士の集会を呼びかけた。このベルンでの集会には155名の議員が参加した。ドイツからは34名、フランスからは121名の代議士が参加した。ドイツの議員の28名は社会民主党の議員であったが、フランスの議員のうち38名のみが社会党の議員であり、残りは急進党や独立社会主義者の議員など元老院議員まで含め多数が参加して、軍備縮小とハーグ常設裁判所による仲裁をもとめる決議を可決した[(40)]。

---

(39)　*Revue de l'Enseignement primaire et Primaire Supérieur. le 13 avril 1913. Dans Œuvre de Jean Jaurès.t. IX, Pour la paix. t. V, Au bord de l'abîme. 1912-1914*, Paris. Les Éditions Ridier., 1939. *pp. 233-234*

(40)　HAUPT, Georges ; *Le Congrès manqué. op. cit.*, pp. 63-64

この当時にはイギリスの国際的デタントを目指すイギリスの自由主義的外交政策に期待が集まり、この動きへのイギリス労働党の支持が期待されていた。イギリス労働党の実質的統一に向けて国際社会主義事務局 BSI のヴァンデルヴェルドとユイスマンスはロンドンを訪問して仲介の労を執ろうとした。(41) これに加えてイタリア社会党の社会党議員グループは1914年１月８日にフランス社会党議員グループに公式の書簡を出してフランス、イタリア、オーストリアの議員の会議を呼びかけた。しかしオーストリアの党の返答はこれらの国の間に緊張はないとして賛成しなかった。(42) ウィーンでのインターナショナルが準備される過程にあった時期に国際的に緊張緩和への楽観論が広まっていた。

第２節　1913年12月13日・14日のロンドンでの第13回国際社会主義事務局 BSI 会議とウィーン大会での報告の準備

1913年12月13日と14日にロンドンで第13回国際社会主義事務局 BSI 会議が開かれ、翌年８月に開催される予定であったウィーン・インターナショナル大会の議事日程と各部会でおこなわれる報告を担当する報告者の人選が議論された。

この会議が開かれた1913年末には数か月前から戦争の危機が回避され、国際情勢は緊張緩和に向かっていると受けとめられていた。その３か月ほど前にドイツをはじめ各国のインターナショナル傘下の政党の指導者は活気を失い消極的になっているとカウツキーがオーストリアの党の仲間であるアドラーに1913年10月「政治闘争においての革命的勢いではなく、無関心と失意と不安がとても広い仲間の中に広がっています。こうした場合にこれが継続し冬の間に惨めさがさらに広がると絶望のデモンストレーションや山猫ストや街頭での反乱が起きても不思議ではないと思われ、政治危機や私たちへの厳しい措置ばかりか党の危機をももたらします。(43)」と警告している。この戦争を

(41)　*Ibid.*, pp. 64-65
(42)　*Ibid.*, p. 66

回避できた安堵感の後を襲う脱力感は、この年の12月13・14日のロンドンで国際社会主義事務局BSI会議をもおおっていた。

この会議ではまず前回のコペンハーゲン大会で12にも及んでいた部会の数を5つにまとめ上げることが決定された。5つの議題は「失業」「物価高」「帝国主義と仲裁」「アルコーリズム」「ロシアの政治的囚人の境遇」とされた。次に各部会の3名か4名の報告者の人選が問題となった。(44)

特に目を惹く議題は国際的にも注目を集めていた「ロシアの政治的囚人の境遇」の問題であり、フランスの人権同盟の議長であったフランシス・ドゥ・プレサンセ Fransis de PRESSENCÉ に決められていた。翌年の1月に彼が亡くなったためにジョレースに事務局は依頼しようとしたが拒否され、ドイツ社会民主党SPDの左派であったが弁護士でありドイツに亡命していたロシア人革命家たちと親交があったカール・リープクネヒトに委ねることに落ち着く。(45)

ウィーン大会で議論される予定であった3つの大きな議題は「失業 le chômage」、「物価高 la Cherté de la vie」、「帝国主義と仲裁 l'impérialisme et l'arbitrage」であった。最初の大きな議題である「失業 le chômage」についての第1部会の報告は、社会主義インターナショナルの3つの大政党であるフランスとドイツとイギリスの政党から人選が行われた。フランスからは、ジョレースからの推薦もあってエドゥアール・ヴァイアンに決められた。ドイツからはドイツ社会民主党SPDの書記のひとりモルケンブール MOLKENBULR が選任された。(46) イギリスはマクドナルド MACDONALD に

(43)　*Ibid*., pp. 69-70

(44)　*Ibid*., pp. 70-71

(45)　*Ibid*., pp. 71-72

(46)　モルケンブール、ヘルマン MOLKENBUHL, Hermann（1851年-1927年）たばこ産業労働者出身のドイツ社会民主党SPDの指導者で、社会主義鎮圧法が施行されていた1881-1884年にはアメリカに亡命し、1889年に第2インターナショナル創立大会に参加。帝国議会議員で1904年から党書記を務めた。第1次世界大戦中は多数派であった。*Ibid*., p. 287

依頼することになっていた。1914年３月の国際社会主義事務局会議 BSI からの招請状にはマクドナルドが報告すると記されていたが、マクドナルドが辞退するとベルギー労働党 POB に交替を依頼してした結果、これら３者によって準備された。ちなみにベルギー労働党からの報告者はワロン圏の議員レオン・トロクレ Léon TROCLET であった。(47)

２番目の議題である「物価高 la Cherté de la vie」に割り当てられた第２部会はオーストリア社会民主党が擁する「オーストロ・マルクス主義」の代表的理論家オットー・バウアー Otto BAUER(48) とイギリス労働党内「フェビアン協会」グループの理論的支柱であり多数の著作の著者として知られていたシドニー・ウェッブ Sydoney WEBB(49) とアルゼンチンの社会党の創立者であり、「資本論」をスペイン語に翻訳したフアン・フスト Juan JUSTO(50) の３人が準備することになっていた。(51)

戦争の危機を背景にして一番肝心なテーマである「帝国主義と仲裁 l'impérialisme et l'arbitrage」の報告を担当することになっていたのはドイツ社会民主党 SPD 議長のフゴ・ハーゼ Hugo HAASE(52) とオランダ社会民主

---

(47)　*Ibid.*, pp. 72-73

(48)　バウアー、オットー BAUER, Otto（1881年-1938年）ウィーンのユダヤ人のブルジョアの家庭に生まれ、学生時代からドイツ社会民主党機関誌「ノイエ・ツァイト Neue Zeit」に寄稿し、1907年にウィーン大学博士号取得論文「民族問題と社会民主主義 *Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie*」を刊行し、同年カール・レンナーらとマルクス主義理論誌「闘争 der Kampf」を創刊してマルクス理論研究家として名を馳せオーストロ・マルクス主義の代表的理論家となった。戦争中ロシアの戦争捕虜となり戦後帰国して２月革命の後にオーストリア政府の外務大臣となった。1938年に亡命先のパリで死去した。*Ibid.*, p. 285

(49)　ウェッブ、シドニー Sydoney WEBB（1859年-1947年）陸軍省職員であったウェッブは1885年にフェビアン協会を設立し、1891年ロンドン市議会議員になった。第１次世界大戦後の1918年に庶民院議員に、1924年に労働党政権に入閣、1929年に植民地大臣になる。労働党の理論家として多数の著書を著した。*Ibid.*, p. 288

(50)　フスト、ファン JUSTO, Juan（1865年-1925年）アルゼンチンの社会党の創立者。医師。「資本論」をスペイン語に翻訳した。*Ibid.*, pp. 286-287

(51)　*Ibid.*, pp. 73-74

(52)　ハーゼ、フゴ HAASE, Hugo（1863年-1919年）1897年から1918年までドイツ帝国議会議員を務め、1911年にベーベルと共にドイツ社会民主党の議長に選ばれ、ベーベル

党の改革派フリーゲン VLIEGEN[53] とジョレースとケア・ハーディの4名であった[54]。しかしジョレースはすでにフランス社会党 SFIO のパリでの臨時大会での決議で述べられているとして報告を執筆するのを断ったとの旨を伝える国際社会主義事務局 BSI 書記ユイスマンスにあてた党書記長デュブルイユの7月25日付けの書簡がに届けられた[55]。断った理由は、彼が参加する8月17日のブリュンと18日のプラハでの会議がウィーン大会後になるためだと述べているが、詳細な理由は不明である。ただしフランスの大会での決議がこの書簡に同封されていた。ケア・ハーディの報告も残されていないが、国際社会主義事務局の招請状の議事日程には彼の報告が行われると記されている。ケア・ハーディが報告の文書を残していない理由は不明である。

第4部会のテーマは「アルコーリズム」であり国際社会主義事務局 BDSI 議長のエミール・ヴァンデルヴェルドとドイツ社会民主党 SPD のエマヌエル・ヴルム Emanuel BURM であった。「ロシア政治犯の境遇」についての第5部会はカール・リープクネヒトが担当した。

報告を担当した報告者は5月末までに報告執筆の作業を終えて、国際社会主義事務局 BSI の手で印刷されていた。第1部会の「失業」についての報告はいずれも詳細にまとめ上げられていた。ヴァイアンとモルケンブールとベルギー労働党の報告は社会保障と失業保険によって失業に対処する点では共通であったが、ヴァイアンだけは失業対策の公的事業に頼ると主張する点で他の2者とは異なっており、これを1848年の国立作業場の古い伝統を引き

の死後には単独で議長を務めた。1912年からは帝国議会党議員団長をも兼務した。1914年8月3日には戦債に反対した14人の議員の1人であったが、結局戦債に賛成した。第1次世界大戦中には独立社会民主党の結成に参加、戦後の1919年にテロルに倒れている。*Ibid.*, p. 286

(53)　フリーゲン、ウィレーム、VLIEGEN, Willem（Wilhelmus Hubertus）オランダ社会民主労働党を結成した「12人の使徒」のグループに属し、「ヘット・フォルク Het Folk（小さな人民）」紙の編集者となった。改良主義の社会主義者で1904年のアムステルダム・インターナショナル大会ではゼネラル・ストライキに猛反対した。*Ibid.*, p. 288

(54)　*Ibid.*, pp. 74–75

(55)　*Lettre de Dubreuilh.le 25 juillet.* dans *Ibid.*, pp. 218–219

継いでいるからだとオープトは見ている。[56] ともかくもこれら３つの報告は統計に基づく調査であった点で共通している。

第２部会の報告は前述のようにオーストリア社会民主党のオットー・バウアーとイギリス労働党のシドニー・ウェッブとアルゼンチン社会党のフアン・フストの３人が報告を書き上げ、印刷されて今日まで残されている。オープトの指摘を待つまでもなくフストの報告はほとんど完成されたものにはほど遠いのであるが、バウアーとウェッブの報告は良く調べ上げられ、まとまった報告としてオープトも評価している。バウアーの報告はルクセンブルクの「資本蓄積論 Akkumulation des Kapital」への反論とされているが、具体的にローザ・ルクセンブルクと「資本蓄積論」の名前を挙げて反論しているわけではない。

オープトはこの第２部会のためのバウアーの報告と第３部会のフリーゲンの報告が結局は開催されることのなかったウィーン大会の方向性を特徴づけており、第２インターナショナルが帝国主義的資本主義の危険を軽視して、資本主義の平和的傾向を過大評価したと評価している。[57]

本章ではバウアーとフリーゲンの報告に焦点を絞ってオープトのテーゼに再検討を加えたい。

先ずオットー・バウアーの報告について検討したい。まず彼は価格の変動についての分析から始める。資本主義の発展が価格高騰をもたらしたという。つぎに東ヨーロッパでの農業生産性の工場にもかかわらず、工業の発展と農業の著しい停滞があるとして両者を対比して、工業における変貌をヒルファーディングの「金融資本論」に依拠してカルテルとトラストと独占への構造的変貌に注目し、工業と農業の格差が物価高の原因であると見ている。バウアーによれば資本主義は即座の危機に脅かされていないが、その発展のスピードを加速する異常さを強調している。そして失業と物価高をとりあげる場合プロレタリアートの相対的もしくは絶対的窮乏化・貧困化ではなく、

（56）　*Ibid.*, p. 75

（57）　*Ibid.*, pp. 76-77

20年この方のヨーロッパ労働者階級の生活水準の上昇を見いだしているとオープトは見ている。[58]

筆者自身で報告の内容を要約するとバウアーは第１に物価高は国際的現象でゆえに資本主義の発展によって説明できる、第２に物価高の水準が国によって異なるのは各国の生産・交通などの条件が異なるからであるという、至極当然の前提から出発する。そしてまず1873年まで物価は上昇するがこの年以降1895年までの不況の年は物価が下落し、再び1895年に上昇に転じると指摘する。彼は電力やガスを用いた動力革命によって飛躍的に鉱業・金属・化学部門の生産を増加させたと指摘する。動力革命は交通革命と通信革命をもたらして、技術革新は人口全体の平均寿命を延ばして人口はヨーロッパからの移民も手伝って特にアメリカでは人口は急激に増加し、交通革命によって先進工業国からアジア、アフリカ、中国などへの輸出は飛躍的に増大した。先進工業国の生産の増大は原料品の輸入の増加をもともなった。その結果1892年から1912年までの「最近20年間に労働者階級は恵まれた状況の利益を受けた」[59]という。

一方、ヨーロッパの農業部門では技術革新の恩恵を受けたにもかかわらず、西欧と中欧の農業生産は農民の工業部門への人口流出もあって伸び悩んだために、農産物を東欧からの輸入に依存するようになった。しかし東欧では特にロシアでは農業は零細で技術革新は進まなかった。アメリカの農業は大量の旧大陸からの移民にもかかわらず、その多くが工業部門に雇用され、特に小麦部門は生産が思うほどにのびず輸出にいたっては1901年から1910年の間に大幅に減少していった。工業部門では独占化がすすみ、カルテル、シンジケート、トラストが作られて生産コストの下落にもかかわらず商品の価格は下落せず、むしろ上昇した。バウアーは金の採掘量の増加による金価格の下落によって物価上昇がもたらされたとも言う。さらに軍備増強のための課税の増加は物価を押し上げたとする。自国の農産物を保護するための関税

---

(58)　*Ibid*., p. 75

(59)　*Rapport d'Otto Bauer, Ibid*., p. 166

も物価上昇に働いたと見ている。これらの物価上昇に対して労働者階級はいたに闘うかについて結論の部分で述べられている。第１に保護関税に反対して闘うこと、第２に生活協同組合を組織して消費者に安価な商品を供給すること、第３に市町村自治体と国家が設立する公企業によるサービスの提供などが提案されている。最後の結論では工業の発展は労働者階級の境遇を改善したと指摘して、1890年から1900年まで実質賃金は増加したが、それ以降はフランスとスペインでは伸び悩み、ベルギーとイギリスとドイツでは減少したために、労働者は抗議運動を起こし、富は独占によって少数者に集中したと指摘している。(60)

しかしこのバウアーの報告にはオープトが言うようなローザ・ルクセンブルクの「資本蓄積論」に対する直接的批判を見いだすことが出来ず、問題となる植民地に対する収奪の問題は正面から取り扱われていない。

オープトと『失われた大会』の書評を書いたマドレーヌ・ルベリウはこのバウアーの報告以上にオランダのフリーゲンの報告に注目している。(61) フリーゲンの報告では19世紀末以降の資本主義の発展による帝国主義的植民地分割によって戦争がもたらされるのではなく、ブルジョアジー内部の平和的勢力が存在するが軍備拡大に反対するための有効な勢力を形成できないでいるからだという。オープトによればフリーゲンの報告の本質は1914年６月まで続く国際情勢についての楽観論ではなく、1912年のバーゼル臨時大会が発した「バーゼル宣言」の前提を覆そうとする試みであると言う。「バーゼル宣言」は差し迫る戦争の危機を強調したが、フリーゲンは国際的緊張が緩和してドイツとイギリスの接近と和解が生まれていると指摘するが、それ以上には彼は楽観的ではなく戦争勃発の可能性を否定していないとオープトは言う。(62)

ここから筆者自身による「社会主義インターナショナルと仲裁」と題され

---

(60)　*Ibid*., pp. 166-191

(61)　REBÉRIOUX, Madeleine ; «Georges Haupt, *Le Congrès manqué*» Annales. E. S. C., 22e année. N. 6, 1967. pp. 1356-1360

(62)　HAUPT, Georges ; *Le Congrès manqué. op. cit*., pp. 89-90

たフリーゲンの報告への評価を試みたい。

冒頭で「私たちの社会で諸国民を脅かす戦争と、諸国民を破滅させる軍備増大に反対する唯一の勢力は社会民主主義であり、プロレタリアのインターナショナルである」と述べて大会報告として当然の前提から始められる。それに引き続いて「ブルジョアジーの政党の中には我々ほどには軍備増強と暴力による対立の解決方法についてのより良い判断を表明していないが、これらの政党はこの目的を達成する有効な力を形成できなかったわけではない政党がかなりの数いる。それぞれの国のブルジョアジーの中にはしきりに平和を推奨する人々と軍備拡大の熱心な支持者がいるが、両者が真剣に対立するのは極めて稀な間隔である[(63)]」と述べてブルジョアジーの内部に平和を支持する勢力と好戦的勢力がいて対立しており、ブルジョアジー内部の平和を支持する勢力に依拠して国際的仲裁を目指さなければならないと言う。外交官や報道や聖職者が軍国主義に屈服するなかで愛国的デマゴギーに嫌気をさして抵抗して、仲裁によって紛争を解決することをもとめる社会主義インターナショナルの運動に共鳴するブルジョアジーもいると指摘する。インターナショナルの1889年パリ大会や1891年のブリュッセル大会、1893年のチューリッヒ大会の決議では仲裁について言及せず、1900年のパリ大会では「ハーグで開催されたような平和会議はだまし絵でしかないことは、トランシルヴァール戦争（ボーア戦争）がそれを証明している」と抗議したが、1907年のシュトゥットガルト大会では「大会はさらにプロレタリアートの圧力の下に国際的仲裁の真剣な実行がすべての係争においてブルジョア諸政府の不慣な試みに置き換わり、かくして軍備と戦争によって食い尽くされる精力と金銭の無尽蔵な資源を文明の進歩に割り当ててくれる全面軍縮の恩恵を諸国民に与えると確信する」と議決し、1910年のコペンハーゲン大会では各国の議員たちに「ａ）彼らが諸国家間のあらゆる紛争を国際仲裁裁判所で強制的に解決することを休み無く要求する。ｂ）彼らが全面軍縮をはかる提案を、第一にそ

(63)　*Rapport de W. H. Vliegen, Ibid.*, p. 208

して何よりも海軍軍備を制限する協定を締結することを、そして海洋の鹵獲権廃止をつねに繰り返す」ことをもとめたとフリーゲンは思い起こさせた。その後で経済的にも物質的にも多大な損失を敗戦国にも戦勝国にももたらすであろう戦争をおこなうことは不可能であると指摘した上で、ハーグの常任裁判所は多くの国際仲裁条約を締結させてきたとしてアメリカが21、スペインが18、ポルトガルとイギリスが14、フランスとメキシコが11の仲裁条約を結んだと数を上げて例証している。具体的には1908年11月のイタリア－オランダ条約や、11905年12月のイタリア－デンマーク条約、1904年２月のデンマーク－オランダ条約、1907年３月のデンマーク－ポルトガル条約、1902年１月の中米諸共和国条約の例を挙げている。特にいかなる国とも仲裁条約を結ぶと表明したアメリカ大統領ウッドロー・ウィルソンを高く評価する[(64)]。報告の最後で「ひとたび仲裁条約が一般的慣例になれば、国民にとって軍備増強は我慢が出来ないばかりでなく、まったく無益であると間もなく見なされるようになる[(65)]」「最後に一方で平和主義のプロレタリアートと他方で好戦的なブルジョアジーという対比にこだわりすぎることを放棄することが重要である。なぜなら非プロレタリア階級は全体として戦争が起きることにいかなる利益も持っていない[(66)]」と述べて大会決議案で締めくくっている。

決議案は次のように言う。「インターナショナル大会は万国の社会主義政党に同党の議会の議員とあらゆる性格のプロパガンダを用いて、可能ならば同じ目的を持つ他党と共に、あらゆる国際的対立を出来るだけ早く仲裁委員会にゆだねるように諸政府に最大限力を込めた圧力を行使することをもとめる。相互仲裁条約の締結において諸国家は対立をこれらの委員会にゆだねて事前に定められた手続きで裁定することがのぞまれる。同様に当該の委員会の構成はこれらの条約で定められることが望ましい[(67)]」。

---

(64)　*Rapport de W. H. Vliegen, Ibid.*, p. 214
(65)　*Rapport de W. H. Vliegen, Ibid.*, p. 216
(66)　*Rapport de W. H. Vliegen, Ibid.*, p. 216
(67)　*Rapport de W. H. Vliegen, Ibid.*, p. 217

フリーゲンの報告はブルジョアジーや非プロレタリア階級の内部の平和勢力に対して強い期待がかけられ、彼らの協力によって戦争を阻止するための国際的仲裁条約をするべきであると言っている。しかし国際的仲裁条約を求めるためのゼネラル・ストライキなどの緊急的手段については沈黙している。今日の視点から見れば、ブルジョアジーの平和支持勢力に対して過剰な期待をしていたと批判することは可能である。しかしフリーゲンの報告のみが社会主義インターナショナルの方針を代表していたと見ることは片手落ちである。なぜなら報告の文書として提出されてはいなかったが、ジョレースとケア・ハーディの報告がおこなわれると国際社会主義事務局 BSI の「招請状」には記されていたし、２人と意見を同じくする第１部会ではヴァイアンの報告も予定されていたからである。オットー・バウアーの報告にしても統計資料の利用の仕方で取り上げた国について一部恣意的であると批判をすることは出来ても、アカデミックな傾向の強いこの報告が第２インターナショナルの国際情勢についての過剰な楽観論を表していると言い切ることも出来ない。物価高について対処する行動方針は多くの社会主義諸政党の代表的意見である。

結果的に見れば、６月末のサライェヴォ事件まで第２インターナショナルに一定の国際的情勢についての楽観論があったことは否定できない。なぜならばサライェヴォ事件は第１次世界大戦をもたらす決定的要因であったというよりは、むしろ口実であって、この事件がなければほかの口実をもうけてでもオーストリア－ハンガリー帝国はパン・スラヴ主義の背後にいたロシア帝国と対決しなければならない状況に立たされていたか、その決意を固めていたことが事後的に見れば否定できないからであり、ロシア帝国の側でもオーストリア－ハンガリー帝国によるボスニア－ヘルツェゴヴィナ併合以来、戦争を辞さない態勢にあったことも結果的には理解可能であるが、いずれも外交文書等で明確な戦争の準備が行われていた証拠は示されていない。しかしロシアとオーストリアが時機を得たならば戦争も辞さないとして準備の態勢に入っていたことは否定できない。

結びとして――第１次世界大戦の勃発と「幻の大会」となった第10回社会主義インターナショナル・ウィーン大会――

1914年６月28日のサライェヴォ事件後に７月28日にオーストリア－ハンガリー帝国がセルビアに宣戦布告するまでは、第２インターナショナルの多くの社会主義者たちも交戦国となる諸国をはじめとするヨーロッパ諸国民は戦争が回避されることに多くの期待を持っていた。

サライェヴォ事件勃発後にジョレースがとった行動については拙稿「第１次世界大戦開戦前夜：1914年７月のジャン・ジョレースの最期の闘争：サライェヴォ事件からジャン・ジョレースの暗殺まで」[68]で詳しく述べた。この論文で述べたように、ジョレースはジョレース生涯最期となる最期の３つの演説――ロシュフォールの演説、ヴェーズの演説、ブリュッセルのシルク・ロワイヤルでの演説――で危機に直面した彼の対応が述べられている。

３つの演説を日付順に挙げれば第１に７月５日の「ロシュフォールでの演説」であり、第２に後世で最も議論を呼んだ７月24日の有名な「ヴェーズ Vaise の演説」であり、最後に７月29日にブリュッセルのシルク・ロワイヤルでおこなわれたジョレース最期の演説である。

第１の演説は1914年の総選挙の結果シャラント・アンフェリウル県で誕生した最初の社会党代議士プーゼ POUZET の当選を祝う祝賀会での演説であり、当時の首相であり、かつては右派フランス社会党 PSF の代議士であったヴィヴィアニに対する一定の信頼を表明し、この政権への社会党の協力による平和の維持と戦争阻止の可能性を表明した。第２の「ヴェーズの演説」はフランス政府の国際紛争への関与と責任について指摘した演説として後世で多くの議論を呼んだ。第３の「ベルギーのシルク・ロワイヤル（王立サー

（68）「國學院法政論叢」第39輯、2018年２月

カス場）の演説」は、オーストリアとロシアの戦争の企てを断罪し、特に秘密条約によるフランスのロシアとの同盟について警告し、フランス国民はこの秘密条約に拘束されて参戦に踏み切るべきではないと説いた。

同じ論文で筆者は第1次世界大戦以前の最後の会議となった1914年7月29日-30日の国際社会主義事務局BSI会議について議事録に基づいてオーストリアのアドラーをはじめ動転した各国支部代表がウィーンでの大会開催が不可能であるとの理解に達してパリで緊急の大会を開くことを決定した過程について記述した。特にオーストリア社会民主党党首の狼狽ぶりは議事録から手に取るように伺える。

1914年7月23日午後6時のオーストリアのドイツに支持されたセルビアへの最後通牒通告と7月28日のオーストリア－ハンガリー帝国のセルビアへの宣戦布告の後に国際情勢は急転直下する。7月31日にジョレースは暗殺され、ドイツは8月1日正午までの12時間の猶予で総動員令を取りやめるようもとめる最後通牒ultimatumをロシアに出し、もう一つの最後通牒が中立にとどまるようもとめてフランスに出された。8月1日15時45分にフランスの総動員令が発せられる。ドイツは8月1日19時少し前にロシアに宣戦布告した。8月3日18時15分にドイツはフランスに宣戦布告した。もはやパリでの緊急インターナショナル大会も開催どころではなくなり、フランスでは「神聖連合Union sacrée」がドイツでは「城内平和Burgfrieden」が成立し翼賛体制を形成して、両国の社会主義勢力も協力するにいたり、第2インターナショナルは崩壊した。

しかし第1次世界大戦後の交戦国での社会主義勢力の消長についてみるならば、敗戦国側のドイツとオーストリアでは、帝国没落の後に転がり込んできたかのように政権を手中にした。両者とも連立政権ではあったが、ドイツではドイツ社会民主党SPDのエーベルトが臨時政府の大統領に就任し、シャイデマンとバウアーは首相の座に就いた。一方オーストリアではカール・レンナー社会民主党政権が樹立された。しかし両者に共通である歴史的事実は、ナショナリストの政治勢力が間もなく勢いを取り戻し、その後の連立政

権にさえ加わることが出来なくなることである。戦勝国の側では戦勝の成果で勢いづいて、イギリスでは自由党政権が継続し、フランス保守政権「ブロック・ナショナル」が樹立されるが、同じ1924年にイギリスではマクドナルド労働党政権が成立し、フランスでは急進党主導の「左翼カルテル」政権に社会党が閣外協力する。戦勝の「分け前」に与れなかったイタリアでは1922年にムッソリーニ・ファシスト政権が成立する。

しかし本稿の主な目的は、第１次世界大戦の勃発によって第２インターナショナルが解体した過程を解明することにある。果たして第２インターナショナルはその楽観主義から国際情勢を見誤っていたのであろうか。それともなす術がなく世界大戦に巻き込まれたのであろうか。いずれにしても後世から第２インターナショナルの各国での戦争協力は肯定的には評価されていない。その最たるものはレーニンなどボルシェヴィキからの「裏切り」であるとの誹りである。

戦争を阻止できずに、勃発した戦争に対して無力であった原因としてあげられる第２インターナショナル傘下の諸政党が議会主義に傾斜して、当時の政権の補完的機能しか果たさなくなったからであるという指摘は、オープトの指摘を待つまでもない。すでにボルシェヴィキが第２インターナショナルを「裏切り者」「背教者」で「日和見主義」「議会主義」であると非難している。しかし元来第２インターナショナルは普通選挙制度を獲得して選挙で与党となって合法的手段で政権を獲得しようとする社会主義・社会民主主義の潮流であった。残された大きな問題点は、世界大戦を阻止するのに失敗したばかりか、国内の民族主義・愛国主義の流れに飲み込まれてしまったことである。そこには合法的な党組織防衛の保存が至上命令になっていたことにあったことは1914年７月29日午前の国際社会主義事務局 BSI 会議でのオーストリアのアドラーの発言に集約されている。彼は言う。

「我々は危険を回避できません。示威行動は不可能になっています。命を危険にさらし投獄に身をさらします。ともあれ我々はその点をすで

に通り越しています。しかし組織と報道機関全体が危険になっています。」[(69)]

第1次世界大戦開戦時には党組織の維持と保守が何より優先され、ほかの選択肢はこの時代にはおそらく考えがおよばなかったと思われる。しかし第1次世界大戦中には、戦時翼賛体制に協力する限りでは組織の存続が認められたオーストリア社会民主党も、やがてオーストリアでは1934年に強権的ドルーフス政権のもとで迫害を受けたオーストリア社会民主党は、武装闘争をおこなって抵抗したが弾圧を受け、多くの党指導者は逮捕されるか国外亡命を余儀なくされるかした。

ナチズムとファシズムが台頭すると、社会党と社会民主党が置かれた状況は大きく変わった。ファシズムのイタリアやナチス・ドイツとナチス占領下の諸国では社会主義諸組織は禁じられ、地下活動によるか亡命先での活動を余儀なくされた。合法主義と複数政党制が社会民主主義・社会主義勢力の前提であり、選挙を通じて政権を獲得するが、その後に選挙に敗北すれば政権の座を降りる。複数政党制をみとめる点で「プロレタリアート独裁」によって政権交代を認めないボルシェヴィキ的共産主義とは完全に異なる点である。しかしナチズムやファシズムによって合法的活動が許容されなくなると、フランスやイタリアなどで社会民主主義者たちも地下活動の非合法抵抗運動に参加した。

ところで第1次世界大戦で組織が崩壊した第2インターナショナルはすべてを失ったわけではなかった。ボルシェヴィキによるロシア革命とソヴィエト社会主義共和国の樹立は第2インターナショナルの運動を完全に否定した上に築かれたものであるからこれを除外するにしても、第1次世界大戦後に第2インターナショナル傘下にあった各国社会党・社会民主党はその灰燼のうえに新たな政府を作り上げる。前述のようにイギリスでは1924年に労働党

(69)　*Ibid.*, p. 253

マクドナルド政権が成立し、フランスでは1924年以降の「左翼カルテル」への閣外協力を経て、1936年にレオン・ブルム「人民戦線」内閣が樹立される。同じくすでに述べたようにドイツではエーベルト大統領のもとにシャイデマンとバウアー首相が社会民主党政権を樹立し、オーストリアではレンナー内閣が成立する。北欧では第１次世界大戦後にはスウェーデンで1920年にブランティング社会民主労働党政権を嚆矢として、デンマークでは1924年社会民主党のスタウニングが、1928年にはノルウェー労働党のホーンスルトが首相に就任し、北欧の福祉国家の基礎を築いた。東ヨーロッパではソヴィエト連邦崩壊後にはほとんどの旧共産党は社会民主主義政党に変貌した。アジアやアフリカ、中南米の第３世界でもアラブ世界のバース党をはじめ社会主義を標榜する政権が数多く誕生した。こうした社会主義・社会民主主義潮流の礎に第２インターナショナルがなっていることは否定することは出来ない。1951年に結成された社会主義インターナショナルが第２インターナショナルの伝統を受け継いで150以上の政党が加盟し、現在では多数の国で政権を担っている。現在の国際連合事務局長のアントニオ・グテーレス元ポルトガル首相はこの国際組織の議長であった。

しかしたとい第２インターナショナルの崩壊後に社会民主主義・社会主義諸勢力が一大政治勢力となっても、この論文で対象とした第２インターナショナルの崩壊過程は大きな問題を残している。第２インターナショナルが第１次世界大戦で露呈した戦争を阻止する勢力としての無力さと崩壊は、これに対するアンチテーゼとして生まれたボルシェヴィキ的共産主義はロシア革命を成し遂げ、社会主義運動はボルシェヴィキ革命を支持する第３インターナショナル加盟の共産党とこれに批判的な社会民主主義に二分され、各国の社会党・社会民主党は分裂を経験した。この分裂を不幸な経験と見るよりは、自由で民主主義が発達した先進国の社会主義と資本主義の発達が遅れたロシアや中国の社会主義との必然的な分裂と見る見解の方が圧倒的に多いであろう。しかしレーニンもローザ・ルクセンブルクも第２インターナショナルのもとで社会主義運動を担い、社会主義運動は当時ひとつの国際組織の下

にまとまっていたことも事実である。ジョレースが言っていたように社会主義は民主主義の究極的形態としての社会的民主政治、社会的共和政であるとしたならば、ボルシェヴィキ的共産主義すなわちレーニン主義は「プロレタリアート独裁」を目指した点で社会主義からの逸脱であるとの見方も出来る。しかしロシアや中国では、武力による革命以外に革命を行うことは不可能であったとする見方もある。マルクスとエンゲルスはバブーフから受け継いだブランキ主義のイデオロギーであった「プロレタリアート独裁」を一時期是認していた時代があったが、やがて先進国での民主主義的プロセスでの革命を肯定するようになった。その意味でマルクス主義とレーニン主義の間には深い溝があると見ることもできる。しかし歴史を「もし」という仮定で考えることはほとんど意味をなさない。ゆえに客観的な結論として言えることは、第２インターナショナルの崩壊は、２つの類型の社会主義を生み出す分岐点となったと言うことだけが客観的事実であるということだ。